

幼稚園教諭養成向けの「教職入門」のあり方の検討

— 本学教職希望学生のもつ「教師像」から —

野坂 尊子

キーワード：教職課程、教育職員免許状、学校階梯、教員、保育者

はじめに

本稿は、09年度から開設される幼稚園教諭養成科目の一つである「教職入門」のあり方を、その担当者として検討することを目的とする。言うまでもなく、教育職員免許法および同施行規則では、教育職員免許状取得のための要件が定められている。最低修得単位数は免許状の学校種によって異なるが、幼稚園、小学校、中学校又は高等学校教諭の普通免許状を取得する場合には、いずれも「教職に関する科目」、のうち「教職の意義等に関する科目」を「2単位」修得する必要がある。08年度現在、本学の教職課程で行っている中学校および高等学校教諭養成では、「教職入門」という科目名称で、春・秋学期ともに各4クラスずつ（定員50名）開講し、筆者もその内の2クラス（春1・秋1）を担当している。

ちなみに、この「教職の意義等に関する科目」は、免許状の種類、言い換えれば学校階梯や中学校、高等学校における専門とする教科によって異なる内容を教示するようには定められていない。したがって、現在の本学における「教職入門」は、中学・高等学校における国語、数学、理科、社会、外国語、音楽、美術、保健体育といった多岐にわたる科目の教員志望学生すべてに同内容の教育を提供するとともに、異なる種類の免許状を志望する学生が同一クラスで履修する状況となっている。

1. 09年度から始まる幼稚園教諭養成課程

本学は、08年度、文部科学省に幼稚園教諭課程認定を申請し認定との連絡を受けた。それにより、08年度以降に入学した健康福祉学群に在籍する保育専修の学生は、所定の科目

を履修し、本学を卒業すれば、免許状の授与権者である東京都教育委員会に申請した上で、幼稚園教諭普通免許状（1 種）が授与される。

この幼稚園教諭課程は、すでに設置されている本学の教職課程に加えられるものではなく、保育専修の学生のみを対象にしている。また免許状取得のための所定科目は、健康福祉学群内の保育専修科目として開設される。つまり、先の教育職員免許法施行規則における「教職の意義に関する科目」にあたる「教職入門」は、本学ですでに開講されている教職課程における「教職入門」と同一科目名称でありながらも、履修予定者は「幼稚園教諭」免許状取得を目指す学生に限定される、別立ての「教職入門」となる。

ところですでに本学は、06 年度の健康福祉学群開設時より「指定保育士養成施設」であり、保育専修に在籍する学生は、所定の修業科目の単位修得によって卒業と同時に「保育士資格」を得ることが可能となっている。現在、幼保一元化の流れを受けた「認定こども園」の拡大に伴い、幼稚園教諭免許状と保育士資格の両方を取得することが保育現場においても望まれており、保育専修の学生たち自身からも卒業後の進路選択上、両方の資格取得は切望されてきた。

2. 筆者が担当する「教職入門」の内容とその特徴

教育職員免許法施行規則（第 6 条）によれば、「教職入門」に「含めることが必要な事項」は、(1) 教職の意義及び教員の役割、(2) 教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む。）、(3) 進路選択に資する各種の機会の提供等、である。本学の教職課程において「教職入門」は、教職課程カリキュラムの中で唯一、教職課程履修登録をしなくても受講できる科目であり、学生が「教職入門」を受講することで自らの教職への適性を再検討することができるよう設定されている。

授業は、日本社会における学校教育の基本的な位置づけと、いじめ、学力格差、不登校といった教職をとりまくさまざまな社会問題化している現象を受講者に理解させることを目的としている。この目的を達成するために、教室内の学習では、教職志望者が身につけておくべき基本的知識を理解させ、それらの知識をもとに、教室外の学習では「教師」という仕事、立場、抱えるさまざまな問題を実感できるように授業を構成している。毎回の授業において次週までの取り組むべき課題を提示し、その内容をパソコンにて作成し印字したものを翌週に提出するように促している。その受講生の成果物は、教材としてその日の授業展開に活用する場合と、回収して内容をまとめた上で、翌週にフィードバックする場合とがある。教室外学習の意味については、初回授業時に四年制大学の単位制度の仕組みを説明し、2 単位の履修には、週に 4 時間教室外学習が必要であることを示し、積極的

な取組みを促している。

教室外学習の軸となる課題は、母校を中心に学校に出向き現職教員に対してインタビューを行い、そのまとめと考察を行うものである。教員へのインタビューは学期の後半（第10～12回）に実施することを目指し、それ以前は、インタビュー時の質問項目の設定を重視し（第6～9回）、教育制度面から教員が置かれている立場を理解するとともに、教員が直面する教育の諸問題を学ぶ講義と並行して、質問項目を学生自らが何度か練り直すように促している。授業内においてグループで質問項目を検討しあう機会も設けている（第8回）。またインタビュー結果を「最終レポート」（第14回提出）としてまとめる際には、単にインタビュー時の質問項目、それに対応する回答内容を記録することにとどめることなく、受講生自らの気づきや考察部分を充実させるように指示している。各受講生の授業当初に抱いていた「教師像」が、教室内学習で深めた知識理解と、教員へのインタビューによっていかに変化をしたかが最終レポート上から見て取れる。「教職入門」は、1年次配当科目ということもあって、特に春学期の受講生は、「生徒」の目でしかこれまで教員を見たことがない。授業内の基本的知識伝達とあわせて、この取組みにより、教員たちも自らと同じように、悩みや不安を抱える一人の人間であることに気づき、また教員の職務は教科書に明示してあるように画一的に示せるようなものではなく、多大なる責任とともに常にあることを再認識し、教職の意義を理解する上で効果がみられている。

3. 受講生たちの「最も印象深い先生」とは

学期最初の教室外学習課題は、受講生が「これまで出会った最も印象深い先生」について思い起こし、その「先生」（この「先生」は、教員に限らず「先生」という呼称で表される人物すべてを含む）について、いつ出会ったか、どういった関係か、また印象深い理由を紹介するものとしている。受講生には、「好い印象」「悪い印象」のいずれは指定していない。これは、次回以降に行う「教師像」の検討において、教師の専門性や人間性について考える材料とする意図からである。

これまで、のべ8クラス（05～08年度、春および秋学期）の受講生たちに同じ課題を提示しているが、「印象深い先生」として紹介された教員たちと出会った時期として最も多いのは、いずれも高等学校時代の教員（約5割）であった。以下、中学校（約3割）、小学校（約2割）と続く。習い事の先生をあげる受講生も各クラス1～2名いた。未だ、幼稚園時代の先生をあげた学生は皆無である。確かに、幼稚園への通園経験がない受講生や幼稚園時代の記憶が全くない受講生も少なからずいるのに対し、高等学校時代は、記憶に新しいことであるから当然ともいえる。また成長するにつれて、「先生」を客観視できるよう

にもなるであろう。ちなみに、高校時代の教員をあげた受講生たちのほとんどが、部活顧問であった教員を紹介しており（約9割）、教員と授業外の時間を過ごすことで、教員を身近に感じるとともに、自分を見ていてくれる、という思いが強く感じられるようである。

受講生たちの紹介する先生のエピソード、印象深い理由の筆頭は、各自で多少表現は異なるものの「生徒一人ひとりを大切にする」であり、「自分と向き合ってくれる」、「親身になってくれる」、「個性を尊重してくれる」といった表現で示され、各クラスともに受講生の5割から6割にのぼる。悪い意味での印象深い先生についても、良い印象の裏返しとして、「生徒と向き合わない」ことがあがっている。加えて、こうした経験は、受講生の教職を志望している理由と直結している。一方、「クラスをまとめる力がある」、「統率力がある」などを印象深い理由としてあげた受講生は、各クラスとも2～3名にすぎない。現代の学校教育では、個別の指導や対応が生徒側からも求められていることがわかる。

4. 受講生のもつ学校階梯別の「教師像」にあらわれた「幼稚園教諭」

前項での取り組みに続き、第3回の授業は、受講生のもつ「学校階梯別」の「教師像」をもとに、教師の専門性について考える取組みを設定している。取組みのステップは以下のようになっている。

<ステップ1>

第2回終了後の教室外学習として、「教師像」（教師の仕事内容、役割、求められる力、もの）を学校階梯別（幼稚園・小学校・中学校・高等学校）に思いつくままに記述し、第3回の授業時に持参するよう指示する。

<ステップ2>

第3回の授業時に、クラスを8グループ（各6～7名）に分けた上で、学校階梯ごとに2つずつのグループが担当になるように振り分ける。

<ステップ3>

グループごとに振り分けられた学校階梯の教師像について、各自が記述してきたものを発表、共有する。その上で、グループとして、振り分けられた学校階梯の教師像をまとめる。

<ステップ4>

ステップ3でまとめた教師像を、1つずつ A3 判の用紙に記載する（その際、A3 判の用紙に記載されている、学校階梯の別「幼・小・中・高」のいずれかの該当箇所に○をつける）。

<ステップ5>

ホワイトボードにステップ4で作成した用紙を貼り付ける。その際、縦方向は、「幼稚園」→「小学校」→「中学校」→「高等学校」の順になるよう、横方向にそれぞれの教師像を貼り付ける。

<ステップ6>

ホワイトボードに貼られた教師像の内容を1点ずつ読み上げてクラス全員で内容を確認していくとともに、同じ学校階梯に、同様な教師像が記載されているものは、重ねて貼りなおす。

<ステップ7>

完成したマトリックスから、受講者各自が「気づいたことやコメント」を所定用紙に文章化する。文章化したものは授業において回収する。

<ステップ8>

第4回の授業の冒頭で、「ステップ7」の内容をまとめたものをフィードバックする。また学期後半（第10回から）の「教師を考える」をテーマとした授業の際に講義する教師の仕事・役割、求められる力、能力などについての基礎教材とする。

実際に「ステップ6」でホワイトボードに貼られた学校階梯別の教師像を、直近の08年度秋学期のクラスのものから紹介する。

<幼稚園>

「優しい」「明るい」「あまり怒らない」「面倒見がよい」「第2の保護者」「包容力」「忍耐力」「子ども好き」「遊びが上手」「安全第一」など

<小学校>

「社会のルール（常識）を身につけさせる」、「コミュニケーション力がある」、「基礎的な知識を身につけさせる」、「絶対的な存在」など

<中学校>

小学校の教師像に加えて、「生徒と信頼関係が築ける」、「生徒を理解しようとする姿勢」、「部活の指導がしっかりできる」など

<高等学校>

中学校の教師像に加えて、「専門的な知識・情報をもっている（高め続ける）」「しっかりした進路指導・生徒指導ができる」「生徒と適度な距離がとれる」など

「ステップ3」のグループ作業過程では、幼稚園教諭以外では、受講者自らが、当時、先生たちとどのような関係があったか、当時の自分自身が何を教員に求めていたのかの記憶をたどり、それを理想の教師像として描き、メンバーで共有していた。したがって、前項で述べた「印象深い先生」として紹介されることが数的に多かった高等学校、中学校の教師像を担当したグループでは、意見交換がさかんに行われていた。一方、幼稚園の教師像を担当した2つのグループからは、「幼稚園の先生のイメージはなかなかかわかない」「抽象的なイメージしかない」という声があがった。実際に、幼稚園を担当した2グループともに、中学校・高等学校を担当したグループの約3分の1の時間（10分弱）で意見交換、グループとしてのまとめも終了した。その様子から、「ステップ6」において、受講生全体に「いずれの学校階梯の教師像が最も描きにくかったか」を問うと、「幼稚園教諭」と答えた学生が大半（8割）を占めた。

「ステップ7」で作成された受講生たちの「気づいたことやコメント」には、各学校階梯について気づいたことをそれぞれ項目にわけて書いたもの、特定の学校階梯のみにコメントしているものの、作業全体を通じて気づいたこと、考えたことなど、さまざまであった。その中で、幼稚園の教師像については、個人としてもグループとしても描きにくかったにもかかわらず、指摘している受講生は意外にも多かった。

幼稚園の教師像についてコメントには以下のようなものがあがった。受講生たちの文章の一部を表記方法などもそのまま紹介してみたい。

- A. 「幼稚園の先生については、優しいとか、明るいといった全体的なイメージしか思い浮かばなかった。」
- B. 「幼稚園はどっちかというと体力や精神面で力が必要とされていた。」
- C. 「幼稚園や保育園の先生というのは、教えるという立場ではなく、子供を守ることに重点をおかれているということ。」
- D. 「幼稚園では、先生は親のような存在である、と分かった。優しさや明るさなど、あたたかみのある人が幼稚園の先生として求められるのだと思った。」
- E. 「幼稚園の先生に求められる力で、あまり怒らない、優しい、と出たが、私がむしろ厳しい先生が求められていると思う。初めて家庭以外の所に出るわけだから家庭、血のつながりが無いからこそ出せる厳しさをみせるべきだと思う。」
- F. 「幼稚園の先生の教師像が出しづらかったのは自分だけかと思っていたが、みんなも同じで出しづらかったみたいだった。また、小・中は社会の常識について学ぶ場であるという意見が多く、幼稚園は家庭での教育の延長にあるものではないと考えることができた。」
- G. 「幼～小の間では、基本的な常識やマナーなど、家庭での“しつけ”ともとれる

役割を家庭のかわりとして果たすことが大切になってくるのではないか。このことから家庭的な包容力や信頼感といったものが必要になってくる。」

- H. 「特に幼稚園ですが、役割、求められる力、共に重要視する部分が違うということが改めてよくわかった。幼稚園はやはり子供がであう初めての先生ということで、基礎的なことをいかに印象に残りやすく定着するように教えられるかがポイントだと思った。幼稚園の先生に限っては、『子供の話を最後まで聞く』ことが重要ではないかと個人的には思っています。色々な日常の疑問などがたくさんでてくるのも、幼稚園生の時だと思うので、子供の質問に最後まで耳を傾け、一つ一つしっかりと答えてあげることも先生の役割として重要なのではないだろうか。」

学校階梯別、子どもの年齢経過による変化を指摘している受講生も以下のように多い。

- I. 「幼→小→中→高 と年齢を重ねていくにつれて、求めるものなどがより具体的になっていた」
- J. 「幼・小・中・高では求められる力は違い、中学・高校になるにつれて求められる力が具体的になってきていた。」
- K. 「年を重ねるにつれてだんだんと専門的な力を求められているのがわかる」
- L. 「求められる事や力は子どもたちの成長とともに変化してくということがわかった」
- M. 「幼・小は全体的に生徒全員を見ているが、中・高は生徒ひとり一人を見ている。」
- N. 「幼稚園から高校までの教育は、一つの流れでできていて、つながっている。基礎的なことから発展的な内容になっていくのだ。また、集団的な教育から、個人をみて、個性を伸ばすという形になっていく。」
- O. 「幼・小・中・高にそれぞれに求められる力は違うということがかなりハッキリと分かる結果になった。自分でやった課題だけではそんなに変化ないだろうと思っていたが、人の意見を出し合うとこんなにいろんな考えが出てくるんだと感動した。幼稚園や保育所という場所は学ぶところというより、母的な存在。小学校では基本的な社会ルール、集団行動を教え、中学校は、コミュニケーション能力や先生としてのあり方を示さなくてはならない。高校生までいくと、進路や生徒の個性などを考えなくてはいけなく、進級していくにつれて先生自身が頑張る力が求められているんだと感じた。」

ここで注意を要するのは、受講生たちは、学校階梯が進むごとに、教員に求められるものを「より具体的になり」また「生徒個人をみるようになる」と指摘している点である。この背景に、中学校や高等学校が受講生にとって未だ記憶に新しく、それゆえに具体的な教員たちとのやりとりの情景や場面が浮かび易い状況があることを忘れてはならないだろう。

他方、総括的なコメントの代表は、

P. 「先生に求められることはすごく多い」

Q. 「『先生』という立場は子どもたちにとって絶対的であり、中心人物である。それぞれの段階の子どもたちによって、適切な行動・態度を取ることが求められる。教師は難しい職業だと感じた。」

であり、教員という仕事を客観視できている様子は見て取れる。

以上、受講者たちのもつ学校階梯別の教師像を、幼稚園に焦点をあてて紹介した。受講生たちが自らの記憶に残る学校生活上の教員の姿や教員とのやりとりに教師像を導き出している状況からみても、現在行っている「教職入門」における取組み方法からは、幼稚園教諭の教師像を描き、またその役割や専門性に気づいていくことには限界があることがわかる。

5. 幼稚園教諭養成用「教職入門」の授業内容の提案

幼稚園教諭養成に特化した「教職入門」のあり方について、中学および高等学校教諭養成課程の受講生たちのもつ教師像をてがかりに検討してきた。そこからは、受講生の多くが幼稚園教諭に対して記憶すら十分でない状態が確認できた。つまり、従来の「教職入門」の授業を履修しただけでは、具体的な幼稚園教師像をもたないまま、「教育実習（3年次および4年次履修）」を迎えることも考えられる。したがって、09年度から開設される幼稚園教諭養成に特化した「教職入門」では、幼稚園教員の役割や職務内容について十分な情報、知識を与えるとともに、それへの適性が自らにあるかどうかを気づかせなくてはならない。同時に、何がしかの幼稚園教諭像を抱いている受講生もおり、それを膨らませるとともに、専門性を理解するための授業内容を提供する必要もある。

ところで、教育制度史上からみても、幼稚園教諭は、他の学校階梯の教諭とは異なる経緯をたどってきた。特に幼稚園教諭の資格は、戦後の学校教育法が制定後も、旧制度のままで据え置かれ、1949年の教育職員免許法が制定され初めて、普通1級免許状、普通2級

免許状および仮免許状をもつことが必要とされるようになった。しかしながら、その過程で学校教育としての幼稚園のあり方、幼稚園教諭の専門性などについて十分検討されているとは言い切れない。

また言うまでもなく、幼稚園教諭は、保育士とともに「保育者」として、その専門性や意義や検討され続けてきた。しかしながら現在、中教審答申（「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」2005年）でも示されているように、幼稚園と小学校の接続の強化・改善が喫緊に求められている。実際に、「小1プロブレム」に対応するよう、幼小連携を促すさまざまな取組みも特区制度などを利用して進行している。改めて、学校教育としての幼稚園の位置づけの再検討とともに、幼稚園教諭固有の役割や職務の明確化が必要であろう。

そこで、幼稚園教諭養成用の「教職入門」について、以下のような授業内容を提案したい。

<授業概要>

この世に生を受けた子どもが親の次に会おうであろう、おとな、「幼稚園の先生」。現代の子どもをとりまく環境、めまぐるしく変わる教育政策の下で、教員たちは何ができ、何をすべきなのだろう。学校階梯によって、その果たすべき役割、求められる能力に違いはあるのだろうか。本講義では、受講者自身の体験や教職の歴史を通じて、多様な教職観の存在を知るとともに、幼稚園教諭の使命と役割・実際の職務実態や今後の幼稚園をめぐる動きを理解し、必要とされる能力は何かをともに考えていきたい。

また、学期中の授業外の取組みとして、実際に幼稚園教員として勤務している教師へのインタビューを通じて、幼稚園教諭の専門性についての理解を深める。

<講義計画>

- 第1回：ガイダンス、授業の概要と成績評価説明、授業外学習への取組み説明
- 第2回：「教師」とは何か1（自らの教育体験をふり返る）
- 第3回：「教師」とは何か2（学校階梯別の教師像を考える）
- 第4回：教職観と教職に期待される役割の歴史の変遷
- 第5回：現代の子どもを取り巻く環境（地域社会の変化、少子化、家族・家庭環境の多様化）
- 第6回：幼児教育の目的と教師の役割（幼稚園教諭と保育士の役割について考える）
- 第7回：教師とコミュニケーション1（幼児との信頼関係の構築）／教員インタビューに向けての取組み1
- 第8回：教師とコミュニケーション2（園内での教師どうしの連携）／教員インタビューに向けての取組み2

- 第 9 回：教師とコミュニケーション 3（家庭や地域社会との連携）／教員インタビューに向けての取り組み 3
- 第 10 回：教師とコミュニケーション 4（幼稚園教育と小学校教育の連携・接続）
- 第 11 回：教師の服務規律・身分保障／教員インタビューに向けての取り組み 4
- 第 12 回：教師の 1 日・教師の 1 年（教師の勤務実態）
- 第 13 回：教師の職能開発のしくみ（免許制度と研修制度の理解）
- 第 14 回：幼保一元化に向けて（認定子ども園とその課題）
- 第 15 回：まとめ（理想の教師像を描き、そのために必要な自分自身の課題を明確化する）

おわりに これからの「教職入門」に向けて

以上、中高の教員免許状取得志望者を対象とした「教職入門」の受講者たちのもつ学校階梯別の教師像から幼稚園教諭養成用の教職入門のあり方を検討した。学期当初に行うこの取り組みは、学校階梯によって教員のあり方や役割が異なることを改めて気づかせるとともに、各受講生の志望する教職についての必要な知識・技能を、自学自習も含めて学期を通じ、深めていくことへの動機付けとなっている。本稿では、その後の教員へのインタビューの取組みによって作成される「最終レポート」の内容は紹介することができなかったが、インタビュー対象となった教員が勤務する学校階梯の教師像については、より具体的に教師像を描けるようになるとともに、求められるものや必要な知識がいかなるものであるかの理解が明確になっていることがわかる。また、教職の難しさ、やりがいなどを強く感じ、教職への志望動機が高まる様子も見取れる。

最後に、本稿では、受講生のもつ学校階梯別教師像のうち、幼稚園教諭のみを紹介したが、中学校および高等学校の教師像に着目して検討すると、そこには、教科別の教師像も浮かび上がってくることを付け加えておきたい。誌面の都合上、詳細な報告は別の機会を乞いたい。例えば、健康福祉学群に在籍する受講生たちが描く教師像には、「保健体育教員」像が示され、総合文化学群に在籍する受講生たちには、美術や音楽の教師像が示されている。受講生の抱いている教師像、教職志望動機、取得するつもりの免許状の種類は、自らが出会い、関わってきた教員に拠っている。教科によっても、専門性は異なる以上、現状の教職課程で行われているように、「教職入門」を志望する免許状の種類にこだわらない同一カリキュラム、同一クラスで履修するのは、教職の意義やその専門性の理解を深めるためには限界があるのではないかと。受講生の所属学群によって履修クラスを分けるなどして、志望する免許状の教科別に授業を行うことで、受講生たちは新たに得る知識と共に自らがすでに抱いている「教師像」を再検討することがよりスムーズに行えるのではない

か。もちろん、「教職入門」は、導入科目であり、また学生の実態として複数の免許状取得を希望する者の問題もあるだろう。しかし、検討の余地はあるのではないかと考えている。幼稚園教職課程用の「教職入門」が開講し、受講生すべてが同一教員免許状取得を目指すクラスでの授業展開がいかなる効果を生むか、また問題は何かを検討していきたい。

授業は学生とともに創る。新たに始まる幼稚園教諭用「教職入門」はもちろんのこと、今後も受講生たちのリアクションを大切にしながら、授業内容、方法を追求し、改善できるよう努力を続けていきたい。

参考文献

倉橋惣三・新庄よし子『日本幼稚園史』フレーベル館（1956）

文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに（1979）

日本保育学会編『日本幼児保育史』第1巻，フレーベル館（1968）